

1. はじめに

(1) 1997 年に OECD の加盟国は、いわゆる PISA(義務教育終了時の生徒が社会に参加するのに十分な本質的な知識と技能をどの程度得ているかを観測する目的の国際学力到達度テスト)に着手。以来3年ごとに実施し、2000 年度の調査では日本が世界一の学力と評された。しかし、2003 年度の調査では、フィンランドが日本に代わって世界一と評され、大きな衝撃が日本中はもとより世界中に走った。

(2) 2005 年3月にヘルシンキ大学で開催された「なぜフィンランドが世界一学力の高い国になったのか」をテーマとするフィンランド文部省主催の国際会議に私も参加。世界各地の教育関係者が集まり、現地の学校視察も含め、熱心な議論が進められた。

2006 年度の PISA の結果は、本年 12 月 4 日に OECD から発表(「OECD 東京センター」のホームページで発表になると予想される)の予定。ゆとり教育のまっただ中にある日本でも、大きく議論されると思われる。

(3) 私が今回、「生産性新聞」をお読みの皆様に御紹介させて頂きたいのは、本書を通じて、この OECD の PISA(学力到達度調査)の根本に流れる「キー・コンピテンシー」(鍵のように重要な基本的能力―林訳―)とは何かということだ。

OECD を挙げて、人生の成功と正常に機能する社会のためにはどのようなコンピテンシーが必要かを調査・研究してまとめあげたのが本書である。3年ごとの PISA の調査結果に一喜一憂することなく、日本国民一人ひとりが「キー・コンピテンシー」をどのように「理解」し、「定着」させ、実社会で生涯にわたり「応用」すべきかを考えることが重要だ。

2. 「キー・コンピテンシー」の3つの内容とは

(1) 相互作用的に道具(言語、シンボル、テキスト、知識、情報、技術)を用いる能力。

小学校・中学校・高校・大学・専門学校・専修学校・大学院などで学ぶ内容が、ここに含まれると私は考える。これからの知識社会で求められるのは、コミュニケーションの手段としての英語とコンピュータ、自分の最も得意とする専門性を、相互作用的に道具として使いこなす能力だと私は考える。

(2) 多元的で多様性に富む「異質な集団」の中で活動できる能力。

相手を思いやり、人間としての新しい絆(きずな)を作り出しながら他人とよい関係を作る能力、協力し合いながらチームで働く能力、争いを処理し解決する能力がこの能力に含まれ、これからのグローバル化社会では求められる。

(3) 自律的に活動する能力。

高い志(こころざし)を持ち続け、大きな展望の中で活動する能力。人生計画や個人的プロジェクトを自ら設計し自ら実行する能力。自分の権利や利害、限界やニーズを自らの言葉で表明する能力が、ガバナンスや説明責任が重要視される社会では求められる。

3. おわりに

何をもって人間としての基本的な能力かを考えるにあたって、本書、とりわけ 210 ページから 218 ページは極めて有用。学校や家庭だけではなく、企業、労働組合、NPO などが本気でこの「キー・コンピテンシー」の3つの内容に取り組み、エンパワーメント(能力強化)に直結。「人間の安全保障」の実現にも資すると考える。